

No. 45	昭和57年1月20日 発行 編集： 後 藤 光 男 〒591 堺市百舌鳥西之町1丁98-2 陵南住宅1号棟116号 電話： (0722) 57局7009番
ね じ れ ば ね	発行： 日本甲虫学会 〒658 神戸市東灘区御影山手2丁目19-8 大倉正文方 電話： (078) 811局2706番 郵便振替口座 大阪 39672番
January, 1982	

仮製本仁己止与世天(1)

後 藤 光 男

(以)

私が「仮製本の仕方」を紹介したのは本誌32号(昭和47年10月1日付)の3頁で、すでに10年がたった。文中では当時勤務先に出入していた印刷屋に三方向を裁断してもらった以外は、すべて私の手作業であると述べた。その手作業は帰宅後か出勤前に裁断をして表紙をかぶせて背文字を入れれば仕上げる寸前までなので、勤務先に持参して印刷屋に手渡し裁断をしてもらって持帰るというパターンでは、早くて3日、休日でもはさまれば1週間ぐらいかかることもあって、断続的な作業に成らざるを得なかった。

新しい勤務先に世話になって1年が過ぎた昨今では、やや自由な時間をもつようになった。10年もたてば学会・同好会の機関紙も巻号がすすんで、総目録も発行される年月なので、仮製本をしなればと考えていた。その後の本誌において、今の勤務先にある事務機器等を引用して駄文を披露してきたが、今回からは一貫作業の仮製本についてであるから、いろいろと智恵を絞って工夫してみた。また、仮製本をする過程で古い会報等でいろいろとその変化を知った。今後「ラベル印刷のあれこれ」と並行して、本表題のもとに駄文を草してみたい。表題の「仮製本」以降はひらがなの「にことよせて」の原字綴である。

(呂)

事務室にある裁断機は製造メーカーの銘板のない手動式である。巾・奥行はともに365mmで厚さは45mmまでの裁断が可能なので、A3かB3までのものが裁断できる。

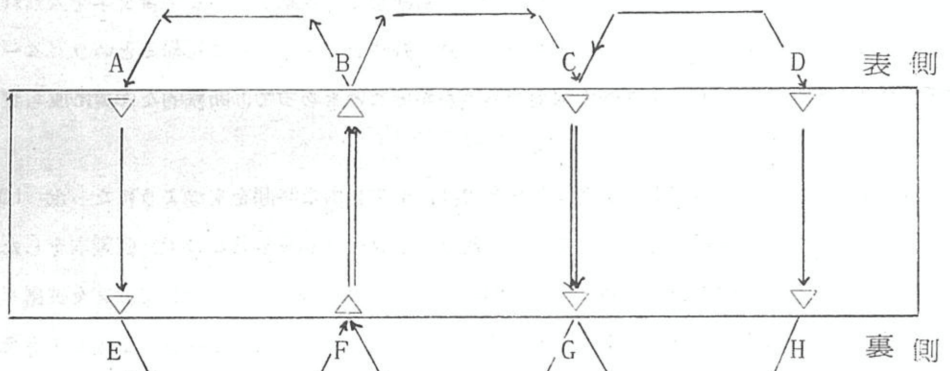
朝、仮製本の予定冊数を携えて家を出る。入室後、その日の作業日程を班長と打合せて私の業務日程を計画すれば、業務時間以外は自由時間となる。不意の出来事で一日を費してしまうこともあるが、電話で応答し指示すれば済むことも多いので、充分な自由時間が仮製本に向けられる。仮製本の仕方

については前に述べているので重複をさけて要点のみに止める。 1) 落丁の点検 2) 製本の組立 3) ホッチキス針の除却 4) 背・底揃え 5) クリップ止め 6) 穴あけ 7) 糸通し 8) 締つけ 9) 裁断 10) 背貼り 11) 表紙かぶせ 12) 背文字・表紙文字の貼りつけ 13) 糊の乾燥の13工程を経て退室時には持参した10数冊が2~3冊に(時には数10冊が数冊に)なって、10日もすれば室内は仮製本の山となった。能率よく作業を進めたので前回よりは非常なスピードアップとなった。

(波)

前項で述べた作業工程のうち4点を改善したので記してみたい。

6) 穴あけ……前回は穴の間隔とタコ糸のかけかた(図示)にしか触れなかったのが、詳しく図示しておいた。私は裏側にタコ糸の結び目がくるよう、タコ糸の穴通しは最初C→G→F→B→A→Eと通して軽く締めあげる。つぎにEのタコ糸をF→B→C→Gと通して、他方の端をD→Hと通す。最後にGから出ているタコ糸とHからのタコ糸を各点ゆるみなくきつく締めあげてGに結び目をつくる。E・B・G・Hの穴先の突出と結び目は木槌で叩いて、平たくならしている。背部に糸をわたさなくても、これで充分である。



上図の三角印は穴の方向を示している。糸のたるみを締めつけて結びとめる

9) 裁断……世話になった印刷屋が近所へ来たからと、わざわざ寄ってくれた。裁断機の話をしたら「注意して下さいよ、手動式ではよく指を落しますからねー」と落ちにもならない注意をしてくれたが、上手にこなしている。裁断の順序は背の反対側→天→地の3裁断で、圧搾の跡をつけないよう一番上に厚紙を置いている。

10) 背貼り……前回では木綿布片を糊づけすると述べたが、今回からはゼロックスの機種を入替えた時不用になった合織の無織布であるウェブを使っている。非常に薄くてタテに繊維が並んだ布状のも

ので、繊維に沿って必要な背巾を切って糊づけする。繊維を通して表紙にも糊がゆきわたるので便利である。

12) 背文字・表紙文字の貼りつけ……前回では号数大の活字で誌名を表示していると述べている。当時もっとも苦労をしたのはこの点であって、4.5ポイントの活字でのラベル印刷ではかなり熟達していたが、私の仮製本の表紙には地模様凹凸のある215KG・厚手用紙(後述)を使っているから、インクが均等に紙面につかない。最初は一枚ものの中央に手押器で印刷していたが、あまり失敗も多くて無駄と考え、小片に印刷して背に貼るようにした。今回は機関誌の表紙をそのままゼロックスで複写して、必要な部分を切り取って貼りつけている。背文字も表紙の字体を生かすため、切り離してタテ位置に貼りつけている。

(仁)

表紙にしている215KG.の厚手用紙とは66レサックと問屋がよんでいるもので、これを買求めるのにも苦労した。最初は厚手用紙といえば美濃表紙か厚手模造紙ぐらいしか知識がなかったから、現物を見てから決めるために20数軒の紙問屋を尋ねた。紙問屋では扱紙が専門化されているようで、どんな種類の紙でも置いている問屋は見当らなかった。「紙製標本箱の作り方」(本誌27号 昭和44年4月)で述べた純白色艶紙も同じことで、これも松屋町筋をシラミつぶしに当ってやっと見つけた。事務所と倉庫が別であったり、素人への少量売りはしていないとかで断られることが多く、やっとこれも松屋町筋の問屋街の南端近くにある大阪紙業株式会社で見つけた。その事務所では2台の裁断機が置いてあって、裁断した紙束はつきつきと梱包されていた。来意をつけると「裏の倉庫に連絡しておくから、欲しいのを見つけなさい」と大変親切に応待された。倉庫は鉄筋の5階建の立派なもので、担当の人はすでに連絡を受けていた。用途と欲しい紙の色と厚さを云ったら、すぐ3階に連れて行ってくれた。その人は紙によっての使用傾向をいろいろ説明してくれて、これがよいのではないでしょうかと勧めてくれたのが「レサック215KG」であった。色の種類も豊富で押圧した地模様が気に入ったので、数種類を各3枚ずつ買い求めた。今回の仮製本で同一色を使い切ってしまったので、ごく最近寄ってみた。よく覚えていてくれて、必要な色のレサックはあったが、そのほか買ってもよいと思う色はなかった。聞いて見ると、色物で特に模様入りはファッション性が強くて多量生産はしないので、廃番になる率も高いと教えてくれた。値段は1枚約35%高くなっていた。

(保)

レサック215KG.は1092×792mmの広さが1枚で、3cmの厚さのある仮製本の表紙ではA5で10冊(切り残りを使えば更に2冊)、B5では8~9冊がとれる。色は赤・緑・紺・金茶・栗茶・ネズミ・白等があるので機関誌の分類を色分けしても面白いのではないかと思った。レサックはあまり

表紙と表題の複写紙の組合せ

レザック	色 上 質 紙
赤	ピ ン ク
緑	ウ グ イ ス
紺	ブ ル ー
金 茶 栗 茶	オ レ ン ジ 濃 ク リ ー ム ク リ ー ム
ネ ズ ミ	浅 黄
白	私は使用していないが、好みで何色でも合うのではないだろうか

厚いのでゼロックスには使用できないが、色表紙に白色の複写紙ではあまり脳がなさすぎるので、色上質紙に複写してツートンカラーで強調することを思いついた。勤務先では居住者に情報を流したり、依頼文書の配布は色上質紙を使ってオフセット印刷をしている。幸いピンク・ウグイス・ブルー・オレンジ・濃クリーム・クリーム・浅黄の7色の上質紙があるので、機関誌の表紙をそのままB5・B4に複写して必要な字体を切りとって表紙に貼りつける。背文字も可能な限りまず白紙に複写してタテに貼り替え、さらに色上質紙に複写し、巻・号や発行年代は必要によってタイプライターで印字して、より体裁を高めた。ツートンカラーといっても、服飾ファッションのように反対色にする訳にもいかないので、必然的に相似色に落ち着いたが2色紙の組合せは、私は左表ぐらいが無難と思っている。

(部)

一気に45冊を複製本した会報に名和昆虫研究所から出されていた「昆虫世界」がある。明治30年9月の創刊で昭和21年まで続いた月刊誌(戦後は不定期刊をはさんで融月刊)である。私の手許には第5巻(41号)から第50巻574号まであって一部欠号があるので、穂積俊文氏に欠号の入手の可否を問合せている。創刊から一貫して更半紙えの印刷なので、古い時代のものでは紙の生命力が全くなくなって、製本の針通しでは紙の繊維が裂けて小片となったり、縮上げではタコ糸が容易に紙に食込んで、一寸苦勞をしたけれども書棚に並べることができた。

「昆虫世界」の製本過程で、発行が続けられた約50年間に会報の体裁と表紙についてつぎのような変遷があることを知った。

体裁: 第47巻545号までは右開き(本文タテ組)、以降の各号は左開き(本文ヨコ組)

表紙字体: 第49巻570号まで明朝体、第571号以降はゴシック体

字体配列: A. 第31巻第364号まで 界世虫昆 号四拾六百参第 巻壹拾参第

月式拾年式和昭和(右書き)

B. 第47巻第544号まで タテ組で昆虫世界 昭和拾七年拾貳月 16 544

C. 第49巻第570号まで 昆虫世界 第49巻第570号 3 1945 三月号

D. 第49巻第571号だけ 誌名はゴシック 第49巻第571号 12 1945 十二月号

E. 第50巻第572号から 誌名は571号を縮小 最下段に昭和21年2月15日発行

字体配列は以上の5種に区分できるが、第47巻544号はタテ組右開き、第545号はヨコ組左開きな

ので、仮製本ではこの2冊だけが表紙どうしの組合せになった。

その他：製本に必要な針金も第38巻第8号(348号)までは中央1ヶ所として極細の銅線、その後は2ヶ所になるが鉄線であり、再び1ヶ所の鉄線と同じになっている号も見られた。

新年早々に穂積俊文氏から問合せに対しての返事をいただいた。名和さんのお宅へわざわざ電話をしていただいたそうで大変有難く思っている。「昆虫世界」はかなり古い年代のものまで残っているようで、最終号は574号らしい。ただ、名和さんのお宅が改築中のため、雑誌類は全く未整理であって何号が残っているか調査できない状態であって、数ヶ月待つて欲しいとの文面であった。私の欲しい号数も残っている可能性が大きく、いずれ折を見て名和さんにお問い合わせしてみようと思っている。

(止)


昆虫関係の月刊誌「昆虫と自然」「月刊むし」「インセクタリウム」の3誌に専用の合本ファイルがある。背部の金具に専用ピンで会誌を固定するもので、穴をあけずにとじ込んで保存するので本が痛まないのと、複写をしたい場合に必要の冊数を外して綴金をとれば両面複写が原本どおりできる利点がある。しかし反面、年12冊発行の予定頁数から割出された厚味なので、保管にやや場所をとりすぎる嫌いがあるのと、臨時増刊号の発行によって冊数が増えた時にはかなり無理をしないと収容できないことがある。また、とじピンが12冊分しかついていないので困ってられる方もあるのでないだろうか。私は女性のヘアピンで代用している。以上3誌の専用ピンを図示しておいたが、「インセクタリウム」の専用ピンは図示のよう

に本にはさみこむ側が丸く内側に丸めこまれているので、つまむだけでこと足り非常に親切である。「月刊むし」の合本用ファイル10冊組(第1次)に付された背表紙貼付用番号ラベルは昭和54年11月15日発行の通巻105号11月臨時増刊号によって順位がくるって(この年13冊発行)1979年以降の号数・年号表示ラベルは無用となった。また「昆虫と自然」の第16巻(1981)は1・4・7・10の増大号に5・12の増刊号が加わり計14冊となって綴込みに苦労された方も多いだろう。

ヘアピン

月刊むし

昆虫と自然

インセクタリウム

昆蟲世界

No.364まで

世界昆蟲

No.570まで

世界昆蟲

No.571のみ

世界昆蟲

No.572以降

No.544まで

昆蟲學評論

蝶佳香蝶
と

蛾類通信

昆虫界

關西昆蟲雜誌
の
世界

昆蟲世界

各機関誌横文字タテ位置に置替

新入会員

住所変更

退会

「昆虫学評論」バックナンバー価格の変更について

郵送料が値上りしましたので、当会のバックナンバーの価格を一部変更いたします。なお、各巻の1号または2号の分冊売りはいたしません。

第1巻第1号、第2号および第4巻第2号		全部で	300円(据置)
第6～10巻	各巻はそれぞれ1,000円	＼	5,000円(据置)
第11～15巻	＼ 1,500円	＼	7,500円
第16～20巻	＼ 1,500円	＼	7,500円
第21～25巻	＼ 2,000円	＼	10,000円
第26～30巻	＼ 2,500円	＼	12,500円
(ただし、第30巻のみ購入の場合は3,000円)			
第31～35巻	＼ 3,000円	＼	15,000円

総目録：第1～10巻、第11～15巻、第16～20巻、第21～25巻、第26～30巻、第31～35巻をそれぞれまとめて購入される場合は、それに該当する総目録は無料で差しあげます。ただし、目録のみ希望の場合はそれぞれ200円、全部で1,200円です。

送料はすべて無料(学会で負担)です。

「ねじればね」も創刊号から(一部コピー)揃えます。ともにご照会下さい。

「昆虫学評論」の原稿を募集します

「昆虫学評論」の原稿を募集します。最近、特定の人々の論文が多すぎるとの批判を耳にしますが、一定の期日（次回は6月）に一定頁数の会報を発行せねばならぬ関係上、会報の頁数が足りぬ場合は、すでにご投稿いただいている手持ちの論文を登載することになります。どうか、内容を批判するよりも、会員各位がどしどし論文をご投稿下さるようお願いいたします。

次号（第37巻第1号）の原稿締切りは3月15日といたします。「昆虫学評論」裏表紙の裏面の投稿規定をご熟読のうえ、ご投稿をお待ちいたします。和文原稿・短報もご遠慮なくお寄せ下さい。

第37巻の会費は4,000です

昆虫学評論第37巻第1号は6月頃発行の予定です。同封の郵便振替用紙によって早い目にご納入下さるようお願いいたします。

価値ある標本をより高く

シーズンオフを迎えての標本の整理には、当学会によって永年の経験を生かして作られた、使い易いラベルのご利用をおすすめします。

見本は本誌44号の12頁に掲載しています。

紙質は90~110Kの上質白紙です。

ラベル印刷用4.5ポ活字セットも新たに2組揃えました。

用具等のご照会は後藤まで、お問合せ下さい。

— あ と が き —

新年あけましておめでとうございます。年頭に当たっていろいろと本年の計画を樹てられたことと思います。当会も永年の努力が実をむすび、やっと会報の発行が正常化しました。あとはレール上を走り続けるだけです。一昨年に比べて昨年は各学会の機関誌発行がややおくれを見せているように思います。昨冬のように異常寒波に見舞われずに自然の摂理によって四季をむかえたいものです。

6月の46号につづいて年内にもう1冊をと希っています。本誌も今年あたりから方向転換をも考えていますので、なにかよいご意見でもありますれば、ご教示下さい。

本年も何卒よろしくご支援のほどをお願いいたします。

(国民登録背番号 51030)